

加々美光行氏を偲ぶ

愛知大学現代中国学部長
愛知大学現代中国学会会長

砂山幸雄

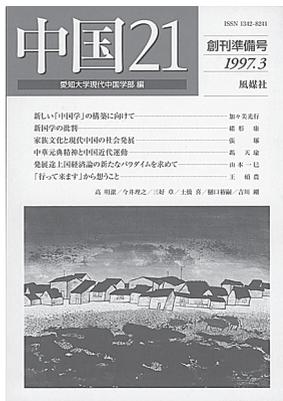
本年四月二二日、愛知大学名誉教授加々美光行氏が死去された。加々美氏は現代中国学部の初代学部長であり、本誌『中国21』を刊行する愛知大学現代中国学会の初代学部長でもあった。だが、加々美氏の本学部および本学会に対する貢献を語るには、同氏が両組織の最初の責任者であったというだけでは足りない。

加々美氏がアジア経済研究所主任研究員から愛知大学法学部教授に転じたのは一九九一年であった。それから数年して始まった大学内の学部新設の動きに深く関わり、全学部の委員で構成された設置委員会の委員長として、新学部の設置構想をまとめ上げるのに心血を注いだ。

文部省（当時）の「原則抑制」方針の下での新学部設置には、学内に根強い懸念の声があった。しかし、本学のルーツである東亜同文書院の伝統を現代に活かすべく、「中国人と中国語で対等に対話できる人材」の育成を教育目標に定め、全員留学プログラムや海外フィールドワーク

活動を正課として盛り込んだ斬新な構想は、大学設置審議委員会でも高く評価された。今日でもなお他大学が容易に追従できないこれらの取組の多くは、加々美氏の発案によるものである。例えば正課科目「現地研究調査」では、学生たちは中国語を用いて中国現地で調査し、最後に現地で中国語を用いて報告会を開いてディスカッションする。これは、戦前・戦中の日本による中国社会調査がもつぱら侵略に利用され、現地社会にはその成果が還元されなかったという苦い反省を踏まえた、東大の社会学科出身の加々美氏ならではのアイデアであった。日本初のユニークな学部、現代中国学部が発足したのはちょうど四半世紀前の一九九七年のことである。

学部設立にあたっての加々美氏の貢献は学生募集にも及んだ。加々美氏は認可が下りる前から、費用負担を誇る大学を尻目に、地元の手予備校とタイアップして全国各地を行脚し、新学部の理念を熱く語って、マスメディアにも



『中国21』創刊準備号
(1997年3月)

たびたび取り上げられた。定員一八〇名の現代中国学部
最初の入試には全国各地から総計で十倍近い志願者が集
まった。加々美氏は自身の理想や主張を、声を張り上げる
ことなく、しかし確信に満ちた口調で滔々と語るのが常で
あった。かつて加々美氏が非常勤講師として講義をした某
女子大では、学生たちが氏の語り口を「カガミる」と表現
したという。「カガミる」ときの氏は、その人懐こい笑顔
とともに多くの人を引き付けた。

本誌の刊行にも加々美氏の持論が強く反映された。『中
国21』創刊準備号（一九九七年三月）に掲載された「創刊
の辞」は、当時の中国研究が一方的な客観的情報の取得
を目的とする「ウォッチング」方式に傾き、研究対象との
対話を欠いていると痛烈に批判し、この「学問方法上の歪

み」を正すことが新学部設置の研究領域における目的であ
るといふ。そのため、本来学部の「紀要」になるはずの本
誌を、学部、大学の外部へ、さらに世界にまで開かれた
フォーラムにすることを創刊目的として高らかに宣言して
いる。本誌が国内外に広く寄稿者を求め、現在も一般書籍
として書店店頭で販売されているのは、加々美氏の中国研
究の在り方に対するこうした鋭い問いかけに由来している
のである。

残念なことに、新学部が発足して間もなく、加々美学部
長は南開大学で実施された第一回現地プログラム（四か月
の中国語研修）の修了式に出席するため北京空港から天津
へ移動途中の高速道路上で交通事故に見舞われた。その後
遺症の影響もあり、人工透析を必要とする身となった氏
は、二〇〇〇年七月に学部長を辞さざるをえなかった。完
成年度前の辞任は氏にとって無念至極であったに違いな
い。二〇〇二年、氏が中心となって構想した国際中国学研
究センター（ICCS）が文部科学省の「二十一世紀CO
Eプログラム」に採択されるという本学にとっての快挙が
実現すると、氏の関心と活動の重点はICCSに移り、海
外の中国研究者の招聘・交流や大学院中国研究科博士課程
のデュアルディグリー・プログラムの運営に氏の精力の大
部分が傾注されるようになった。

私が近隣の公立大学から愛知大学現代中国学部に移った

のは、ちょうどI.C.C.Sが始動しようとする時期であった。たまたま東京の研究会で同席した某私立大学教授にそのことを告げると、加々美氏と親交のあった教授はちよつと間をおいてから言った。「きつと苦勞するよ。加々美さんはなにしろ十二人兄弟の末っ子で、面倒なことは『よきにはからえ』だからね」。——故人となつた同教授の忠告を、私はその後ときおり思い出すことになつた。発足間もない現代中国学部は解決すべきさまざまな課題を抱えていたし、今にいたる四半世紀の間の日中関係の激動に翻弄され続けてきたと言つても過言ではない。それでも、本学部が掲げてきた高邁な目標を少しでも実現しようとして、教員や職員が費やしてきた労力は並大抵のものではないと思う。今もこうしてその努力が継続されているのは、われわれもまた加々美氏の抱いた理想をそれぞれの仕方でも共有しているからに他ならない。

日本における現代中国研究の牽引者の中でも、思想、文化から政治、国際関係、ときに経済まで幅広く論じることができたという点で、加々美氏は際立つた存在であつた。しかし、氏の本領が最も發揮されたのは、やはり「理念」が問われた文革研究の領域であつたと思う。私が初めて氏の警咳に接したのは、一九八一年の中央大学で開催された日本現代中国学会全国大会であつた。共通論題の報告者として登場した氏は、人間の主体性とその平等な相互関係を

重んじる「コミュニケーション主義的理念」（コミュニケーションニズムではない）が毛沢東の思想の中でどのように形成されたか、またそれが文革の展開の中でどのように挫折していったかを明快に語つた。文革の権力闘争としての側面ばかりが強調される当時の研究風潮の中で、文革の理念を独自の視座に立つて救い出そうとする若き日の氏の「カガミる」姿は、今も鮮明に私の記憶の中にある。一九八〇年代、大きく転換しようとする中国をどう理解したらよいのか。その答えを探し求めていた文革に関心をもつ多くの者にとつて、氏の一連の論文や評論はそのための貴重な手がかりとなつたといえる。

人間の主体性の定立をモチーフとする加々美氏にとつて、中国が抱える民族問題も重要な研究テーマのひとつであつた。氏は、中国の民族問題がさほど注目されていなかった一九八〇年代から精力的に論者を発表し、それらは今でも中国の民族問題を研究する際の重要な先行研究になつている。圧迫に苦しむ少数民族に対する氏の眼差しはつねに温かい。しかし、氏は彼らの民族運動の中に分離独立を希求する「ポジティブな民族感情」と外部からの圧迫に抵抗しようとする「ネガティブな民族感情」を区別したうえ、後者をより重視した。氏は第三世界のナシヨナリズムを「ことごとく国民国家形成に向けた運動とのみ評価するアジア学者一般に見られる認識の偏り」（『知られざる祈

り——中国の民族問題』新評論、一九九二年のあとがき）を批判する点で終始一貫していた。氏は晩年の論考の中で、グローバル化の力学のもとで中国の「少数民族」が民族の壁や国境を越えて「主体としての自己のアイデンティティ」を求める動きを加速させ、それが翻って多民族国家・中国の再生を促す可能性に期待を表明している（『未完の中国——課題としての民主化』岩波書店、二〇一六年、二五八―二六〇頁）。昨今のウイグルをめぐる状況は氏の期待に應えるかに見えて、実は鋭い刃を突きつけているようにも思える。晩年、氏はどのような思いでこの状況を見つめていたのであろうか。

加々美氏の独創的な現代中国研究は、いつの日か後進研究者によってトータルな分析が加えられるに違いない。私にとって、氏は研究上の同業者、あるいは学部の間僚という立場を超えて、竹内好や溝口雄三らと同様、中国をどう理解し、どう向き合うべきかを終生の課題としたひとりの日本の知識人として、注視する対象であった（と言っても氏はきつと怒らないだろう）。氏は従来の「ウォッチング＝観察学」方式の研究姿勢がもたらす認識の歪みを克服すべく、「コ・ビ・ヘイビオリズム」なる方法論的態度を提唱した。それは目的をもって中国を研究する者は、研究対象である中国人や中国社会の側もまた目的意志をもつ存在であることを意識し、両者の意志が対立したり協調したりす

る相互運動作用を視座の中心に置くべきだという主張である（『鏡の中の日本と中国——中国学とコ・ビ・ヘイビオリズムの視座』日本評論社、二〇〇七年）。一言でいえば、研究対象と対話せよ、対話を通じて認識の歪みを正せということと受け止める。

私は加々美氏のこの提唱に深く共感するとともに、どうしたらそれが実現できるだろうかと考える。氏が研究をスタートした時代と違って、今は中国人研究者との対話も容易にできるし、共同研究も可能である（最近ではまた制限がきつくなつてはきたが）。しかし、氏の求めるものはきつとさらにその先にある。日本と中国が「互いを映す鏡」であり、その「鏡の歪み」を絶えず修正することが求められるというが、それは「鏡」だけの問題なのか。おそらく氏は「鏡の歪み」を修正していくことが、日本と中国の関係のあり方、さらには双方の社会自体をも変えていく、そうした道に通じることを夢見ていたのではないかと思う。現代中国学部やICCSも氏の大きな夢の一部であったのだろう。今、それを氏に問えば、きつとあの笑顔で「よきにはからえ、だよ」と答えられそうな気がする。